助辭本義一覽

上

ホ 2
5602
1

門 ホ 2
號 5602
巻 1
和 二 冊 十一 號 函

池庵橘守部大人述
同　嗣業冬照大人撰

助辞本義一覧

全二冊

千鍾房發行

[stamp]

助辞本義一覧

提要

此頃ちかきまなび人々は、わが池庵にまゐりつどひ来て、父なる翁守部のてにをはのことを問ひもとめ、翁も中々にきこえ方より諭されけるに、聞人みなよくさとりえて、せちにこひねがひけるに、さらばとて助辞本義考といふ書を、古言を採べきよき書の旨てにをはと出むとき、其の紀を追ふ事あらば、おほねいれてしらせよとて、彼此をとじの根くもちて問ふりける、紐鏡詞の玉緒など、係辞も前人が考へかね解けるに、係かどもとも辨へられける後、皆人やすくよろこびて、根なる事をさまゐて、纏ありけれど、いとせる善本にも、乏のせられざるがうちあれば、まのがうてしられど、思ひて、いぼいらば、まづ目録中なるのこれを筆記て、上梓せよ、一わたりのかかる考へ、簡古なるもたらぬあんとて、おのれ冬照ぞ示

[stamp]

今さてれぬ。さぐれつもかくるかなて。さぐくしのまどいるぶべるにわるれば。
仮さを取りてはるくもるしつ。彼本書本義考は。一音の雅語をつづ。
音は開合。呼吸の動きもあるべ。めて。仮云ゆるれかつをごをもをん。證と引き例
を挙ていを詳くるのせれてかれどそを其徴證。例は如かと省き。要を
採て。只もう云音義は一端のをうつぐ抜出されば。そをまく本義考は一覧
とは名つるぬこを其本書れ。さぐくしうるん。れとくき初学は徒乃。
うにらるむ。ごにとて別ん。れこの本書もいまぶ稿を脱せられば。
後を再考るぐくはかて。ごは一覧とはるるかるんもかくしをさも
あらば。是を一説ともてしうしなるをもを。をぐきゆをるしるの
せれば本書のを抜をうひあ。あるあ語りを引出てんはけう弱くを。

一本書は。をらくぐくに謙退はつぼうひあて。物と性るは。ひ定められ

ぶ。たとへば此言のをは。をかくるやあるんは。は本居大人はおぐるり
ん。とかてもるせれど。きての本紛学は。は。たるるぬこちもあ。
やるれば。人をもかるるひて。をを何のもわづ。翁は考へのるにきやや
うにそれを比定めてもるるつ。うやいふきるはもいるであるのは。廣き
るれることおるのへあくむ。ともあるまもを人をを見るべられてなるを。

一此書ぞ。可の上は開ゆる置。ともぞやいいいい
上巻るを出し。又其。ともぞやいいこと等を。假を指辞とあづけて。を
受辞とあぶ。あて。下巻を出しつかくるるのて。上は巻特へ合をてはは
の上は指ぶ。下の受ざるの。こまやの加るを。をるるねをせんとてなり
名は。是と本書るは。上二巻下三巻以て引合をぐくせられれば。いくくゆき
書るして。精しるとをを簡約をもれるて。一紙をを加るを。るるべた

はぶかれば證文などもえひかず。事すくなにゆゑなきにしも多かり。然れ

人よくくみとりてよかし。

一 上巻の指辞の部には、下巻は三转の格を除きて、三转のなきは辞の置所

又かはりもすなるべき用ひざまなどをのせつ。下巻は受辞の部には、

彼指辞は部に出たるは皆除きて、下の受辞のさまをのせつ。さてかく

そのもとは、そのかはりを知らんかためなり。さてやく世に普く弘りて世にも

知られたるはすべて名目によりて方々にありぬとて、三转の辞どもの

に用ひたるすべて紐鏡によりて、その他のことども詞の玉は緒に對へてとのせたり。

一 玉の緒二巻に出されたる、下よりかへし立てるてにをは皆の中にことに其義

抄はそひかへられ書どもに出て、そをいはれるの立のわざの人多くあれども。

世にあるべきなれば除きつ。又二重にかかれたる所てにをはあまたあらそへるは

いにし稀するわざなるか。文などにはその混じて章句はもしくあるなるも多かる

その所にあるを除かるるのみにはあらずゆゑあれば、もとより文のさま

もれなりとて本書にこそ。文部に出さんとて除かれれば、それもそれに總

べり。又五巻はなりばに出世除。さて又ず。等の類、又七巻古風の哥

の辞どものさて本書にも漏されば、それらはいづれも本書の追加とかへて

あるも書きそへぬべし。

一 此書などは、元より學者は見べきものにあらず。たゞ入立は児輩をもとは

ねとてのわざなりければ、卑言も嫌らず。文字は雅俗にも拘らず。それと

志れなるものどもにも見安く耳に入安からんためなれば、俗言・俗字を用

ひたるも多かり。識者よく見てあやしぶことなかれ。

一 かゝる目録をそへたらば、引見むに者よからんとてあらためて、本書の

箇條もあるべけれども省略すれば、これぞ今の世に用ゐる辭を挙んもをこがましかりぬとてそうらふ。昔ぐ上巻をそもそも徒そのやうにしてと云ふして出し、下巻ハそれぞれに紐鏡に二結の辭どもを除いで、其末に玉の緒、二巻より見ばまぐれる出ぬ所、受辭どもの中にもそれぞれの辭どもと併せうるせて出ぬ。大ぬ次第ともそれぞれ、もろ〳〵べまする。

天保六年十一月

橘冬照識

助辭本義一覽上巻

上指辭部

橘守部述
同冬照撰

下巻三轉上段指辭 紐鏡 右行

○は

もの音ハは又齒葉羽端などの如く物を切分ち離つを一統あり。一統とハ總てゆ音に一音毎に言ひ統五統ばへある。その一統をいふ此事の考へは五十音圖説に詳く挙げ、その音にて云詞ゆ上に離放葬拂投撥掃散等は数多くも此故なりかせるに、此もの辭をたゝバ二つある物を是ゆ〳〵と云て一ツ取分る時も殘る一ツハ即てわろきゆゑまた又今日は完しと分ちて云ばゆ時暗まで也暗うなりしゆゑ〳〵はゆゆゆゑ〳〵是を以て推もに所に入ればきゆゑと云ふ名に分ちて辭。秋はきゆゑ〳〵と云も夏と分ちて云辭なり。其中に秋は軽きと重と有て、至て軽く用ゐる者あるぢち分ふる程ならぬも也ゆめまど程それも辭の上にまを置て者分ちて云方より出るなり。又此は一歌息れ一

続あるこそ也行と同じく喉音ゆゑ也。それあの音にて、あゝと歎くと、又はの音にても、
はれ一アと歎くこれあるべし。笑ふ色に、アハ、と笑ふ声、又泣くにも、アハ、と声立て
ハア悲しやなどゝて、泣くのあるなども、皆此故也。さて四れ一アハ、
れは其ハ一アるゞ歎くに、中國邊にはそも專云ふなれど、東國に
老人れ言ふ、遺れるのみ。れやうなる。即此あゝとそれと二ツ相重るなり。
歎息れ言ふ、あれそれゝ也。れ歎息此除の下に出ル。此ことゝ以て思べき也。

古十九
あをゝ柳をかいまもりてうぐひすのはつねうれ花。
拾一
はつ〳〵ゆれ花。うぐるあ〳〵ものはうぐひすの歌。○ナリケリ
○ナリケリ

此等れ格にきこえても、君れ分つゝとゝくゞ、古今なるもゝ、ゝれわゝくゝ笑はれ
きゝ知るもあるゞ。花ゝ色もあるゞ。梅の花ゝ色ナリケリと、尋常の色に對て、取分
ちゝ色也。拾遺あるこゝ、みゝ〳〵ゝ色ゝれば、名菜小松と、結ぶもゝれど、先ッ行り

結ぶこゝは、當れ事ナリケリと、他のものに對て、取分ちゝ色也。されば、留りの下に、
取分テ歌詞のナリケリれ含れる也。ゝれ色ゝは、ゝと云て結ぶ。動ゝれ言て結ぶは
ものゝ色ゝ、いづれ諸ゝ色ゝ也。それ指辞に限りて、かく第一格のあり也
せば、結ぶまぢきこゝもあるゞれど、此格は、次れ也ぞや何こゝ第ゝ色、まゝ
あるて、只留りのゝ、結び辭と者るのゝなり。れゝゝゝ、上に指辞ゝ、うゞ
徒の格ゝゝ。

古九
みやこにて月みるこのゝ系いづれ月ゝ。
四十四
あるゝ月しゝもゝて、ゝゝ月ゝ。
なるゝ月ゝ。ゝ多ゝ。ゝゝ對ゝ。動ゝれ言ゝ。
べきゝゝゝゝゝ。
らゝゝ。事毎ゝれ得ゝゝ。

[illegible]

[illegible]

此格を彼五の緒に入れうるて結ぶはといふもとゝうるる故に歌語に
[illegible]ものなれとも同じるものにて指辞のみをバ云うれる句にて
常のみ也そこの句も捨るを入ぐてを止じと云と山科に云
うもて大方は世間のて不遂て止めるを多く習ひに分ちてよもたぐそ
を止じと云いる也新古今に歌を稱きを多しと云と大原に云ける
て世をそむくば憂きもいとて常の習ひに分ちてなん憂きの多る
ものをいる也かくて此等は句の留りのてにをはを省かと云を玉の
緒の此格中に並べ挙る句に
あるとはいるをもわそ江はをつくしてもきき世をもちる

[illegible]に直に[illegible]を添へるもあるて紛し此格もいるるもの指辞也
[illegible]て全は間を省るもいとは働なし
[illegible]ものをいるにはなくのみをいるるにはうくぐるにはちよくる
[illegible]にはあれて人にはあらしいるるはやをとるきも秋の野をいるる
かをいるるを合せてあるを分ちを八間に也を此古今にいるるを
の物毎にいるるに對て八色にはうくぐると取分ち又を前にいるるには
岩のあるに咲るを分ちる也又は歌を八にはあれ位人は老ぬる
ぬく取分ち出て一ツも取漏なく荒れてるをつるるを世
此歌を四五に入るはきねるをはやどにちかしまねをのをもてふひとは
る[illegible]後撰五に昔のをし考はれるし秋風を吹よりあるぬかをうれ
し[illegible]新古五に人はをそ風に本の葉はちはてをふれくもはあるる

るべしとあり。此等も、そなびせさ方、悪き方を、一つゝ取分ち並べく、
云盛とはなくさのせてるるなり。

古一 ゆゝしは松のゆるぎたきるるに、野べは野べ、はなれはなれ、
同 少しはなれ、てもしらずふるさとは花ぞ昔の香にほひける

さびあるべく、そのきらねば方と、美めきくわる風つゆ方とを分ちて合せ
る也。さるを、人の心はしれぬべき方と、物のとれるべき方と
とを取分ち出る也。物は数、絵種ありても、皆定まりなずらへ、

古十六 うずくまれとはなれぬものなれば山のすみをあそれとはえよ

菅万下 わがもとに大そらとなんやもえわるあをまとをぶりまはして
古今なるべし。家とのゝ、なほざりなる事方を対て、あれ出方を分ち
出る也。菅万なる時、事を対へて、おのづからはと取分ちる也。

置さは、をものゝ形をもあり、はたものを分ちなん時は、
吐を、彼をなど押へ辞して、只おのづからなり。此歌を多の絡に、一つのはしをて別て拳ケ
る。是も絡さしき論ーぞよ也。さは上のあくはと二ツ三ツ合せて置るる方
を、一ツ物ありて、ゆれば、一格ともて焉べれば、ーつる事常のかまして、即
是は、彼はなぐさは別に格を立べきは、あくまでもきわぐなり。

拾三 さて、わはは、ふれみまきれて、ともぐく苅めてはいまはのべ、どこで知る
ふは、考れるなりて、五月雨ふるはとゝたにとあれるなり。

もも

古十二 かたそのゝ、ものとあてはおれに出くる事はたるつて、ものきるふ
日十七 さくはは、事にふりつむ雨れとなるとくぶちゆくわちさるつそ
はそはは、ふりはと、欲くはとを相兼て、君をれ、アとぶんのそれると、一ツのそ

を省ける也。凡て目言の重る時は。おのづから一ッ省る事。旅人(タビヒト)を。タビトと云類の如
し。さて歎きて云こともある也。何の事あれ上よりいひ下したる。餘情
あまれる也。古今十一の歌に。〽あはれてふことはあまたにはゞれアコヒシヤ又イカニセンなどやうの意を残せ。
十七なるを。〽わすらるゝ身はあはれアハレ。夢ノヤウニ過ケル哉。又或ハ。再ビ返リガタキコトヨなどの
類の意を含める也。是を尋ね覓(モト)むる辞と。一方よ見える人もあれど。さう限るにハ
あらず。古今廿の歌。〽わがきみをのちはいかにせむ。留りの下に。サテモ〱深ク積リタ
ルコト哉と云ほどの言を含めり。又ものゝ歎息の意ありては。唯恒のはとのみ雖
も。おなじやうなれども。はるも。猶歎息の意あるがはじめにいへるがごとし。伊
勢物語上巻に。〽いでゝいなばけるはし。源氏紅葉賀に。〽…ものは。
なぞのるはも。皆歎息也。猶此等のことハ。ちまたに蘆荻鈔 古事記書紀哥解 全部十五冊 に。
詳く弁へおかれハ。ちまたに委ねて省けり。

もや

拾六 〽ふゞきむすぶのこゑぞ聞れゆくもかくてさぞにこゑやしもや 〇ハレアナヤ
はるそ。是上よのごとくしや。阿夜(アヤ)。または阿那耶(アナヤ)などの耶にて。即あれアナヨとよむほどの
歎きありかくて其歎きなるに含ませるものを。此奇てもさぞ。〽こゑやしも
も。それアナ。何レホド恋シク悲シカリツランと云程の意を含ませりた也。又日本武尊紀に。〽あづま
はや。又其太刀はや。たゞ宣ひきて。戀慕ひ尋ね負ゆく猶ふかき含ませり。允
恭紀に。〽はなはやみてるや。とある類も。此義賞(ホメ)るをれ。猶いひなれ
まて上れもこそ此もや。と歎息の意。大なる相似たる中にも。此もやの方重
くきゆる事。右のアナヤれ歎以て味ふべし。

をば

古八 〽秋ぎりはたちぞへばるよ如くせどもそばましてをしとおもへく

けを濁りても取分つまる音は同じ事也されば等のこれをばもとより出る所
ゑ山ゝ代杵のをとゝ水を呼ぶのわれ[illegible]とゝ同
じかりて如ゝまゝ[illegible]ゝ分ていくる也此外[illegible]
[illegible]ばなども皆同じこれは変るもちがれば変る也

てば

梅ゝ[illegible]と神ゝ[illegible]てゝ[illegible]
日九
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
てば濁り付る音は[illegible]の色彼而有をなる而有となる同じくて
[illegible]の文[illegible]なれども[illegible]故[illegible]
[illegible]と清て云とは[illegible]
なるべし[illegible]ばは言のはの[illegible]

そ[illegible]
[illegible]
[illegible]

下巻[illegible]段指辞 紐続 右行

も

ま行の音は唇音にて唇音を唱るに唇れ相合へる即物の相
合ひ[illegible]に[illegible]る一統あり[illegible]を此もの音にていとゝ先ッ両諸[illegible]と[illegible]
訓て諸諸共諸髪諸實両矢両刃共臥左右折戸などの数多う又持齎
共居榎舫舟の又古書に[illegible]と訓付る處に亦字と書るなど皆相並兼る
ある故也又神代紀に若煙火と訓萬葉に如己男と書るなども相比ふる也
即此字をコロと訓来れども比ふと[illegible]ゝ故也就中此もの音は唱る
に唇の形体の口を結ぶう如くなれるより即纏くるう[illegible]ゝ[illegible]ゝ一統あり
裳紐義裳の裾襴褌の類[illegible]袴も著裳は義なれば共に纏る
あり又黐餅縻戻捫鍬捂荼[illegible]ゝ黐し縻[illegible]の名也又むの音に

て、共・對・睦・結・掬・約・群・叢・連は、散まじの音に、又股・跨・儲・混・交・眥・絡・迷・紕・
纏・縻の類多かる。ならく五音皆合せて右の音義と同じ。又しもじにも、欲
息の主なるがあるまで。喪・最・燃・悶・脆・等の類は一統なり。こを本と愛悪
ともに、眼なれて、忍ぶに堪ざる方より出る也。萬葉五長歌に、父母を
見れば貴く、妻子見れば米具斯宇都久志。今の俗言に子は愛憐にも、
ムゴタラシイコトじゃなど云。ムゴイメニアフ悲歎にも。ムゴキも即此米具使は賜せる言也。かくみて神代紀に憐愛、又仁慈・愛
恵などを訓る合せて、めぐむもめぐしも本同語なるをもて知べし。てにをはもじの欲
也。此をもて考ふべし。三絶の格をこゝに載ざるは、上にいへるがごとし。

新古七
花ならで散ぐもがれ戸をさしておもふところもおくも。みよしのゝ山

後古一
ありしぐらゐでなきとうきみてかわるをば我のうへも。おもへしらまる

此類の哥ども、もじの下に、同じと云文字の合めるも、その言に、本と相並び兼るをあ

る故也。結句に、べしやと合るを、もじの言は餘格也。これらと其の緒に、動かぬ定まで
むとぶもといへる。其の條に弁ずるがごとし。

後十五
これやこのゆくもかへるもわかれつゝしるもしらぬもあふさかのせき。

新古十四
わすられぬ身を度のおもひおかれて人をも身をもあはれの夕ぐれ。

此哥どもにも、もじの下に請けたる合るも、右の相具ふをある成也。後撰の哥は留
りにもじを合はするまで初句のや、は定也。新古の哥は留りに九哉と合れるは、
もじの言は皆助なり。是等を以ても彼紐鏡の結まで出せる結の法を泥み
て、假名を結びの格なりとて叶はずんもとも置べき所にもなく置きことと至
べきにもじを置ずして、欲れとものゝ一首をも越。言の静かな
どにかゝはらぬ時を、都てにをは調ひたるは、あらざれバ所詮本義なる
覺ぬ入らん外はあらざるなり。此類とむの結に、これの方にて結ぶもとよる。

是又此の際に弁ぜるがよし。

古一
ちるらで昔れまつの花さん桜の色をぞ思ふとも。○二ツナガラ ある人ぞしる

新古十六
われもすみよしも。○同ジゴトク おもひわすれしなのさかりまさるやしぬらん

これもの下に。両ツナガラとも。同ジゴトクとも含るも。もと云て右のことあるが故也。

後拾十四
しら露もゆめもこの世もまぼろしも。○皆同ジ如ク たとへていへば久しかりけり

同四
あきも秋こよひもこよひ月も月やどるところもきみも君 ○何レモヨク相ヒニアヒタリ

ふさはあるる雲ならも。然るも右のことにことはなほし。傷はくんたる詞も

まて味ふべきなり。

千五百番秋二 忠良
宋のゝあれの花床のね
さそひきてこそせもきうせも
山おろしのかぜ

拾貝
旅ねするいこせもきうせも
もろともにあかりし山里の
かりほの月

十四
出づるやせも○きうせも○萩の色さくゆふかげのそよぐしの露。○ズ

千五百番秋一 公経 ○両ツナガラ ○セン ○セン
そよあしの萩の下根にまくむしのなくとバ。これやせも。きうせも。○セン ○両ツナガラ

ちぎりとまの結にいんのをのもと標してぞ秋に云ひこれし兵に。へぬせんきうやんと云

ゆりもけ未分柳をもは
うちせもきくせもうちせも
せんきうせしせんといふ
家をいへりれというり

まふり。故に六百番歌合に。有家卿。へあらしふくむねとみだれに吹きそてぬせも

きうせも山おろしの風」是ハ上の歌を。へぬせもきん。きうせもきんと云ことに詠り

て。へぬせもきうせもそふ山おろしの風と云ことならんるひがの也。後にも此

をを誤り。ある歌多し。心をもといへる。万葉にも多し」以上 玉緒 などいへる此釈にて

却てひがことはあれ。此ハ右のごとくいづこまでも相比べ兼るとある辞なる

故に。此歌どもも。もとより二ツナガラと相含れ且ちて二つ合れるなり。又言の下

に。へぬせもセン。へきうせしセンと云ことれ含れる也。されバこそ。引きいるる家々の歌に俊

成卿の判詞にもせる難もなかりしが。又万葉にも心をもとづくるものあると二つに分

られなるもひがの也。彼も古言に格なるもあり。歌身のことなるもありてこれらの

用ひざまとは。ことなり別也。和泉式部の比よりぞ只彼一首のことを古語に依りて

してもつよむべき

古十五
拾二
あくまでもあくまをきてゆくうかのつやとなりてごうれ一ゆ。
おくまでもあくまをきて月のくもりつよも出をしぬればあくまのつ。

ゐをを軽く添るもとくあり。こを彼、欲息てもの下に二アと加へて。ゐ。その世れ言に。
それハマアと。敬きて云ニアハ。即もの通音なり。轉じ易る也。言の
初に付ても。モウク苦労デナラヌ。モウノ、部ナコトヨ。などゑも。マ
の音にて。ニ也。さて此もの。直にマアの言に。常るも有。又もの下
に。ニアと含めるもある也。上のもれ下に。又もれマアと。含れるも
あると同
一例なり。されば。ゐの相兼るもあり。却て重ーとなるべし。軽しとハ。ゐれ
まぢきるか。かくて上のはも此段のもを恒の用ひざるの外ハ。欲息の一種ある
のみ。その他ゐもそなべて右のごとくいづくをも貫きて一つるとしてこれをも。箇
條を分ていつるなるべくに。詳しく。人まどゐをと見ゆるもさに。多しう。
五の結に。筆とるに際のあるまをいそぐ。次のそれと。三十五種に分ちのと。二十六七種に分ち。中部
たがくにつるりて。六十七八種に分てるがのぬき也。是と妥しといそぐ。委きまるもあれど。

中に入。全同ドゆるも多うるに。雅文に分ち出て。何の格。それの格とまひてこのせわしくそ。
迫と。詳しくはるこをと。れさるを初学のまよ。そ。除をもるびゆるるぶに。進とまひ
るびもれて。却をてにをはに。倦はられ。終と。奇とあんとも。ゆひまりあるるびも
ゐるを出面。又他う。除を分つほどまてはむけに言のをとるるぶ。適加へるる
言ぐも。出むつうこのるこひるーてわざと人に。疎きものるを。思をん。下がまくさく
ぐ。ゐるもりける。移さても。彼。大人まて。ぶるるまてかくいりのせるふとぶぐみ。思ふ
に。此書を。出せるほどを。京に。蘆庵。蒔蹊。江戸に。千蔭。春海の主達。何をも。出まで。ハ
かるる方にはふるくるのせれまぐら。ともれば。本居翁をそ。れるくせのあり。れハ翁
も又かくこさる人をとりぐるるこをば。やとて。わざとかまつて。紙うもとしうるば。を。
せれてるるぐあるに。即印比をのせりし。西霞と云まに。いぐるるこをばやとるね
ゐ。ぶりとるるも。そ。元より彼翁は。ゐるるること。そぐ。はるひあハとれぬる。あるれ

かゝる歌なの在りし来たる大人をもきこゆることのをつとめて行ふをもをうしくならきて亦しや

さるにかざるまく、此さまは安らかに、其情をよくしられまうばめでたき書れいで来るましきものと、あやしき方に心くくまうに初学のうちにくとまどはしく、疑義なる書とは、まかつるやと、わが文詞、笑ひなづるそかかるれる。

○徒

下巻三轉上段格　紐鏡右行

古十七 おちつまづみみれのとやし徒に老となりし肌のくろきまぢるまじ

日九 みやこ出て君があふの原いづくぢ川うち風きむし口ゐろてうせ山

万二 こわ山の山べなるそゆよらしの中かくのに故まふかくと打ひきし

新古十一 うちそのやらひちしきものをさのそれどろも其のいのふられはきうちられど

徒にとそかくの如く、ちらし取分るてもそも相兼ね示すくをきと云るがまに云てげて上に指辞を置ざるをつかる也。さるゆゑに此格の詞をも皆一ッやうにて打のづゝ分寿すぐた多かり。かくれば此格をも元来一もの部よりそちらに出ぞきる

まうすれど、ちやく紐鏡などにも、かく挙して、世の人もさる事あればぞれに随へるまるに、結びの格は、これもと同じうるは、彼分て兼るも其詞の格わぢかなるをてを続にニッをこれおつかまるが故なり。猶此格の中にも許のそては、これも等をなかきにも、これもとを人にもくるそて吟べきをもありてそれを許なるにて解べきなるを。

○そ

下巻三轉中段指辞　紐鏡中行

さ行の音に、植竹、植苗、芽蕨、根生、萌芽等に一続あるを、歯の音にて歯そ、口に、根生る物なるが故也。此一続八、下の三結部に六段、又サ四段等に去るなどやそ。別続なるがかくて此さ行の音に物を指て云詞多かり。前と云も後よりも先をも指し、先よりぞ後をも指し、以前より以往をも指し、以往より以前をも指る。是互なり指して云詞なる故也。岬、崎なども、ほり出る處をいふ。的、神武紀訓的も、箭も

當を指言・刺差・指狭渡等も、皆右の定なり。又定誘率等の類も、
なぞらへて、又志の言にて、然と云も、上と指、云云（神武紀訓云云）と云ふ省略
を指ることにて、其々といへんもおなじ。古事記・萬葉等に、其の花と云ことを、
斯賀波那・其の父と云ことを、己之父などよみたるも、上に其の出たる
と、再ひ指て云ときの詞也。標・導・築・簽・印・知領等のことも、又准ふべし。
又そ・その言に、彼處と云も、所を指て云詞、足下と云も、對ふ人を指て云
詞也。凡此等に對へて、てにをはのごとも、其の義あることを知べし。（ごと濁る事無
もとよりは引連けしる。下にのみ附る
故に、上れ言に牽れて、渭は習へる也。されば此ごとも、物に就て其物事
と、其と指定めて云ふことのみ、用ひ来りて、字書に其爾等の字と、指物
之辞也と注せるは、因し、其をそとのことにて、恒に其所と云ふ、其者と云ふ類、
皆に、そもそもに、そもるもんもて、よりてうがめし、かくて彼ある物あることを、

指定て云のみにもあらず、物とゆびさしもて、いろやうなるも、これ是不也、そ吉今
七に、かそどのにわれしきて方代をいとよりて神でもきこえ、所、春日社とゆび
さしもて、此御社と神ぞ云云といふ、ゆびさし指定めれど、神の子心を、
出るまゝに云なれば、神ぞとうるなどぞ、いと極めてうれしんとぞ受る
也。又四十八に、わづらひをみやこのつとにもなども、自身は庵と指さし
もて、これ此通りにぞと云ふ、ゆびさし也。こゝ自のうへなれば、もとむと性に云ふ定めて、
凡そ此等と以て、てにをはに、結びと合せん方にも、他に云べき故とうるれ
て、用ひべきやうにと思へば、狂言に、三摶の格とも一ツ出て、彼指定め云
ことばにて、

古二
七
後十
ちくらむ少くちりぬともはなもあくねし
るとともはいさきれし身もわれぞらべのなきこちせ

此古今なるまで。花に對へて人のあふれる方と。指定め。後撰なるまで。ふなよ
船に對へて家居るべき方と。指定めいへる也。

古十八 神な月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞこれ。○十九

後拾十一 おぼめくなたれともなくてよひよひにゆめに見えけん我ぞそのひと。○十九

此類を指定めつる下に。なりなると云受辭を省る也。是をもの結に動かね
言にて結ふぞとしる。既にはの條に弁へつるがごとし

千五 雪ふればなげきにのこそはなしじとなりひとくまぞもちる葉のなき。○九
こそおもひやくるぞしると。指定そてそを即て。其ら菊にいひつくて有り。
の下に。彼ゑりると云受辭を。省るなれば。其上なるは同例にて只いひつく
れるのみは違ひなり。

古十二 わがこひはゆくへもしらずはてもなし あふをかぎりとおもふばかりぞ。

日巳 名にこそはをれるがうりぞ。○ヨ 一をよくよむべし。是はおちらまきて人にかゝるなり
をの結に。此類を切るぞと云て五種に分てる也。係のうるさしてはこそ恒には上句
のほどにて。其(ソレ)と指(シ)置て次によそゆきようを。下へいひくだして結ぶ例なるを。
この格を。彼(ノ)下へはこぶる詞と上句の間(タ)に皆いひおさむる故に。ぞの指(シ)辞と一つ
句のかゝりめまで引下ケ来て。即てあるとぞ以て押へる也。さて此類のぞは。
あらばにても切るてふあるを。又押へる下にはヨの言の含る故也。此より八多く
を今にもさを
なり。おそらく上に指(サス)と。下を押るとの。二ッの心あるべしと。今の俗言以ていふなら。其が然(サ)ア
去去九 是ハぞを上に置方なり。とも。彼へ去去(ナニく)ノコトハ。如此(カウジヤ)此(ヒ)ハぞを。下に置方なり。とも。常に云ふ
ごとし。又うく句の終(トヂメ)に置ぞにて。ぞヨとよの言の含れるも。俗言に彼事(シカく)云云
ゾヨとも。其事ハ云云(シカくジヤ)其とも云。即此等のジヤをへ。其よの訛て傳へる言なり。又
新に此ふらぬのぞを。とく受て。へなきくそぞとふた云云。へ時ぞとおもへど云云

とやうに、ひくべきぞ、ものつるも、ナキ名ジヤと、時ジヤと、云ふ也。かく下ニ、ジヤと云ふハ、上ニ必ず其ハ、と云ふ助ひ有りとして、推定むる言のをを、知べき也。又うしと云辞へ續くて、かごうぞうし、此の中ぞうしと、結めるる歌も、かごうぞうし、此の中ぞうしのををく、ぞうて切をさるべくうしハ添るる也。

拾二十
ながくるぶにはまぐ、とくくわくぶにまてらんのうそいのうぞ

同十二
ゆめのうも、おもかぐれどわやそせ、ものうぞ、ものもれぐるきを

これも俗ニ、何ホド其、何ホド其、何少其、幾等其などを故と問て、押へるを

さるゆゑニ、切をなり。

後六
をとみるぐ、まむ、ぐとたれうつもしのをにををぞ

同十六
あちらのちにらい、き道もちのみ、をどうれ、まにををうふうぞ

かゆうニ、此れ、をどの歌の結言の下に、他の言を隔てるも、俗言ニ、誰待テ、云云ス

ルト其、何為ウレシイニ云云ス其、など、此、又それと上ニ附て、其者誰ガ云云為名、其者何為ニ云云為名、なども云ふて、此歌いづれニ云、續くるとも、つれわくぐ、又下

と、やうと受て、をふぐのをちをぞとよ、何ぞをちき秋の夜ぞとよ、などよむ歌を、大方、やてよのをとて、よを問、うをやる詞也、又ぞとけと置て、

此ぐ為ぞ、いられる人、よかくるものぞは、などいるけを、歌為て、例の俗言ニ、誰為ニ将為、オニヘ為其ワイ、他ノ人ニ将係カイ、オニヘニ其ワイ、などニワイニ

当りて、もちやなどの、ちと同し、歌の緒の歌ニ、此もにををのとのべを、いろ

しきへぐの也、いとちくらあり、歌鳥のをを、合をたるものをや、又うへる山

何ぞはあり、いのちやを何ぞをあり、云なども歌息て、何ぞは、ニアと、

含りて、うれべし、次るぞもと、相似ものをれば、右の古今集るる、いのちやけの何

と、六帖ニ、何ぞもとて載セ、菅家万葉ニ、かるを、ニなるぞは、者の、云云の何と

一本に、八ふぐでもとあり

ぞでも

古一

いろかもしらぬあきのはぎ

仮拾四

いそぎしく家ぞきされ山ざとに

これらハ、問ふ也。ぞでも問をあらそ、その俗言に、其都何に其、彼ハ誰

其などゝいふごとし。もを歎息して、賞美のあまりに、彼ぞ袖ふれし梅其ニア。

いつかもとめる月其ニアと問ふを即ちもつる也。さてかゝるふるまひすれば俗言と

引出ものゝ、たをはおのぼらるゝのゆゑ、俗言のうへ、そもをそ

たぐひなけれねばなり。

ぞや

拾七

いとかもせーあまのをぶねいづくぞや。ゆるめぐるとてあちこちして

彩勅十三

いつかもかしけすぞや。ゆるめるをそれをくこゝろ

玉の緒これらのやを、ぞを、添ふるの也と教せもたぐひなり。やハらに通ふやゝ

て、問ふくる也。此ぞとやゝの差と、そぞ、ぞを上のやゝ、ぞを、と問ふの詞を辞て、

呼ぶうゝて問をまでなあ、ぞるをやを呼ぶうゝて問ふときの声也。ぞをハ、

右の事ども以て多つ重し。大方玉の緒などゝ、ぞ、重ねるてをは

も、いつもぞ、そをゝ、などいふれど、ぞをなく、不用ふる詞あるゝ

ぞ。ぞ助辞(ゾスイジ)といふも、行なれくのゝをあるゝのあると。

いとゝて

後十六

みくに岡いとゝぞ。ふるをんものみゆるとさてゝ

拾十五

のぎりのをくをのそこにそれバいとゝぞ。ぞ、とゝ

玉の緒、此歌の事、七八首出て、其釈を上件いとゝを、十紅十ゝをあしで。

活る辞(ソ)にて、十のうちなるべし。新古今に、なほそのうちなる事、例のきひがごとやあらん。已上五緒なるべし。疑ひいふる事、彼人も似たることなるべき説ども也。されどもそれ

を、水(ソ)曽伎(キ)は易にて、曽伎(ソキ)は万葉に、山乃曽伎野(ヤマノソキヌノ)之衣(ソキ)とする、天地乃曽伎(アメツチノソキ)ハ

どもなして、物の際界(キハカギリ)といふる詞也。書紀に、庭宝(ダウ)とあるも、宝の極みなるをなれば、限りと云に同じ。是もあ

出く、集中に、幾許と書て、いくばくとも、そこばくとも、そこらくとよめる。此いくばくも、いくそばくとも、いくそばくそ

と、そこらくそと重りて、へいくそばくとも云る也。恒に、いくそばくと云も、幾量許(イクソコラバカリ)と也。後に物語書などに、いくせのたらの字、

いくせのうきあるべしなどいふるも、そこせと通音にて、同語なる所どもにて、知べし。

抜去詞のすは、下巻受辞部に、初段に云と合せて、委きこと明らめてよかるべし。此そこ、此段のそ部に出べき辞にもあらず、部にて出べきなれ。

もぞ

抜去

ありねとて、打ふしもぬるぞ、いつれとなくてあやぶれこそもぞ、

金一

もぞ、ふるあめのいとまなくしもぞふる、あしのやつをのうへにしもぞふる、

もぞ、既に、ものゝ如く、物と相兼る辞にて、恒に、大方甲と乙とを相兼ね、此と

彼とを、並べ比べて云事なるに、此もぞ、又下にもぞなどの時、それとも

異にて、今と、今より以後とを、相兼ていふる、即てその指辞の相助て、

所謂行末を危ぶむ意なる也。されば、うしろみもぞする

も、さきの段を兼て思ふに、恨ぞするのを也。又あしのやつをのうへに、明

を兼て按ずるに、あしのやつをのうへに、危ぶある也。打ぶしもぞふるも此

意なるべし。

言一

あをを柳のいとまなくしもぞふる、春雨

拾六
あまざかるひなのしら人｜こそ時なるところなびゆきける
此等の｜ても却てと云にあて、歌せるもあり。ふるきにも恒に
〽ありしもよ〽しかりしをも〽かゞやくもしげくもあれ。古今の例なり。
いと多き例なるを。却てと云にあてはめてはかなはず。其本と云るをの
詞なるをば哥也。されどとよみたるも多くて引る例多し。其意にてあ
てはめたるもあれど。紛はしく見えてゆくまゝにて。猶ひがごと
多かるは。そも｜此言の意を。さる其の意にて歌よみたる故に。
此其と撰出て云く其語勢や似て。〽見しも八日も多きにぞ日
｜もの意。〽かへしもを。歌も多きに。〽かへしものを。〽わがせをしも
を。宿も多きに。わがやど宿を｜ものを也。是に准ふるにその哥
ども。古今なる哥〽おとろふる時もあるべきに。糸ほかくるをりし｜も

ぞ｜けの意。拾遺なるを。〽旅立日も多かるに。時なる日に｜もぞのを也。又
又鮮ならば。〽おもしろき〽をしも〽なにはづとぞれ四ッ相共に一ッに貫きて。
ゆくら例也。されど恒に此をとれとらずて。〽をかし｜もあれ。〽時｜もあれ
などやうにこそと同じく結むる也。云ふ勢ひは同じかる数なり。
万葉十八に長哥に。〽おくを｜しもあやまくすしみ。云云。いひつぎに
もれ。後拾七に。〽おとみなりし多かる野べに声の｜もあれ。云云。新古
六に。〽みわ｜もあれなごめて多かり。かくて此處玉の緒三巻。
うらの例。云云の考なるは多かり。かくて此處廿葉廿一葉に引る。さぞてを。
紛ぞ。さぞ紛れを。紛ぞ歌はるゝ也。凡てうら例なる八。歌きのあまてこそいふもあ
らざれば省りつ。又
後十一 あひ見てぞ多くさる山やぞ｜わするゝに｜もさて来つゝかあれ
後拾六 ねよしくぞ宿ほそらん〽とおなじ｜ともあるさとぞそ〽づぞとはるく
此段探なるまで。ぞといひ云れをさて一たび結びて。直に｜と受て。下へ引つけ出る也。

後拾遺ものを。一ぞをうんて結び。ぞを白て切れると。又と一を受て引ぞけるへ
凡。のく受辞をて活のして續くるもの。いづれのてをはのてをも。当てあるもの
なるもと。玉の緒ものよりぞ。ぞとくるもかるれしき伝おもて。
千十
和ものやおもてろれつるるば是ぞそれ。ともそせまし。その。伝
後十五
うばくまのてをひごろぞあけ。一。あけるば人をよそにてをためし
れるを。第の下に受辞のなるを言を省る故。切て也。玉の緒の歌を。
よろしうらず。

○の

一を。所有（アラユル）言は中に。最一なるべう。ぞ。ある音多ありれば。恒切て詞の連接（ツヅキ）と
もて。離々（ハナレバナレ）なる。詞語ものを活て續るれば。即て連（ツラナ）續つざるでなき。
世とへば。山。禁。里。家と。四ッ離れるも。山の一
禁の里は。家などいへば。即て續くるが如し。即此音て信延（ノビノブ）伸（ノベル）斗（ノル）など

の詞はあるも。延（ノビ）のどはる義はある故也。又も音色。そぐれて柔和（ヤハラ）なるれば。
此音て限りて。幾つ重ねても耳こそけるもしし。此て先ッ此音はるぶるこの
に。和（ヤハラ）なる大はのをな行は五音相合（ナボロカニナムナノナヲナヤナネナヒナシナダナグ）て。そくこのいくば。風（ナボ）。和平善宥兎（ナダム）。
慰撫（ナグル）。摩（ナボル）。直（ナホレナヲ）。平（ナダラカ）。平穏（ナビラ）。靡（ナビク）。馴（ナヒル）。姉（ナヨロカ）。娜（ナム）。嘗（ナメ）。舐（ナメラカニ）。滑（ナメ）。煮（ニギ）。柔（ニゴ）。和（ニレ）。黏（ナヤス）。滑（ヌメ）。光（ヌル）。綾（ヌル）。沾（ヌレ）。
塗（ヌリ）。莽（ヌナ）。草（ヌナ）。蕈（ヌメ）。沼（ヌカル）。泥（ヌカル）。濘（ヌカル）。錬（ネル）。煉（ネル）。調（ネラス）。練（ネル）。黏（ネヤス）。延（ネバ）。寝（ネ）。和（ノドカ）。長閑（ノリ）。海苔（ノリ）。糊（ノリ）。血（ノリ）。
此等ぞれも皆平穏なる方。又滑らかなる方のみ依れるを以て知べし。これ此音
也。舌音は和なるまて。たい行も。舌音なれども。其動き状やゝ異なるき
程のたうしあるも。下巻三摂部（方ある故と。此引行とは言の活きも。又それ
廿六段など。合せて心はべし。口を唱へ試むるに。黏（ネヤ）るが如く。摩（ナグ）るが
ごとくなるもの。音義も又それに随へるなり。詞て。ふるくなるく。なるく。
しなめはくゆるし。ぬるく。平言て。ぬらし。めるはく。はめる。ぬりく。
のろし。のろく。のろはく。のろけるのろまどえも。皆右のでう也。
されば此の言を。弁のてにをはて用ふる中て。右の連接（ツナグ）方と。物て親しみ

附方とは、二続け外にあらし、接き連る方を、

万三 いにしへのさとみの時のうたほのうらのゆふきれば海ぬるみ

新古六 冬ごもりのこもりの枯ぐのもとものうたおもふる月のうぶのさゆるを

これらの歌のもじあるを、句々離々にまうして、語をなさざるを、たがく

多く入混るを、耳に立ぎぬるを、二ツ三ツぐらあ

入まじらぬを、ををくなし、ものを禁ぜれば、ものを文績くを

古十七 あるハさくぐし、又物に親しき附方を、

水のうへにうつるあれの影をうばはんとすれば、ものを

日二十 をぐろざきをのらどもの人をうばみやをつたにぐをうらと

假にこれらの歌をもぐじかく物の下に親き附方、ものづくり船が之嶋が之と之を通

じてちゆるを、をを恒に、天之國之神之君之をぐと云数の之と同じ、即汝爾若、

如似をぐれ言の、通音にて、船之を、船汝、嶋之を、嶋汝、天之を、天汝とを

むぐれき也、人の字、又物の称をぐと名とを、右ぬの通音にて本皆一ツ

あり、万葉三に志斐と云、嫗のをと、志斐能我とをみ、十四に夫名と、勢奈能

とをみをと、其同巻一丁の末に、勢奈那とをみたりかれば枕詞に、春花之

云云、照月之云云、零雪之云云、をぐ者をるも、之れ下に、如と省るに、ハあ

らで、之と云ぐ、直に如の義をる也、さばく如、しをを如、生玉如、

やを、歌如なぐ、續け云るに、合せて知べし、又あふこのやうぐの山いうものや

いうほの浦、石見のや高角山、うの内のやかるをき山、なつせのやゆづきぐ下、云云

をぐやに置ものし、右ぬ志斐能、勢那能ぬ類にて、汝の義也、さて此汝を、即

美言にも云詞をりくれば、大國主神の御功を賞て、大名持神と申

稱言ぬ方にも用ひて汝命、那兄那姉とも、又下に附て、彦名表具那、於伎那

ども。又倭根子（ヤマトネコ）。伊呂祢（イロネ）などいふも用ひたりければ本ト之直に右の如く定め
に親しミ附て汝（ナ）。爾（ナレ）などいふより出たるなるべし。又此のは言は右の如く親語の
下にのみ附て用語は下に居（ス）ゑざるも。右の意なればなり。かれば物を指（シ）定むるぞ
なぐしは。其音義元より異にして。他の指（シ）辞は如く。結びに開（アツカ）るべき言にハ
あらざるを。ぞや何等と同じく相並（ヒ）べて一ツに心得来しハいかなるひがことなり
けん。さて其例をいはゞいはく。

古四
待人にはあらぬものから初かりのけさなくこゑのめづらしきかな

後十
わかものくもいふ人のなければ□いづくも宿のかりどころハ

これらのは。彼ノ紐鏡などにぞ其のにハあらずとて引きたる。花のちるらん。
月のかくるてなどのはと同じなれど。誤るなと笑ふなり。

古十二
花すゝき穂に出て恋ひば名をゝしみ下ゆふひものむすぼれつゝ

拾十六
うめの花よりさきに咲しかど見る人まれに雪のふりつゝ

これも同じのなれども。つゝと定めたり。

新古三
むすぶ手に影みだれゆく山の井のあかでも月のかたぶきにけり

金一
ちりかゝる花をしきしき雪のこゝちして払へぞ袖のぬれぬなりけり

これらも同じのなれども。けりと留めたりのたかくいづれの辞にも随へれバ彼三格
の格などいふも。只皆それ〴〵に随つるまで。其をはぶきも徒の格にてき。現在
き。ぬる。つる。ける。らん。けんなど常に同例なりければ別に其格とするも
あらざるにこそ。さる故に右の如くなる。つゝ。なり。此三つに准へて。せり。なり。たり。めり等凡
て紐鏡の。右行の辞どもして。古るすゞ多かる事と知べきなり。して結ぶ方ハ。恒にいと多かるを彼三格
の格に出せるを。却て稀なりければこそ玉の緒の一巻にかつべに出せるに。
いと求めかねるさまにして。其の足らはざる所て。多くかえるなりれ。又

古一 あさ柳のいとよりかくる春雨はしもぞみだれてものちところびける

日十七 おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの

これも上とおなじのもじと、ぞと重ねたり。

日一 かくぞのわかれつらやしろたへの袖わかちてひとのゆくらん

日十四 まちわびゆくあさせの川みなかみはなかりとや人のおもふらん

これも同じのもじと、やとうけたり。

日二 ちるとみるふたあるをけらしていらせよくのうぞのふくらん

日八 いのちだにあらばたのめるそのまばあきこそわれのなるよし

これも同じのもじと、何と重ねたり。彼紐鏡の中、行、ぞ、や、何と、一ツ格の結辞なれば、かく同行の重き辞とかさねても置まじきものなるを、上れぞらし、うる、浅く、ゐまでしても侍び、ぞ、や、何、なる等ともかされ

くるとて元より結びとは拘らまじき言のよしを覚るべき也。然るに五の緒まぜに、のれ格とて分ち出せるのことこそあれども、ぞふそれぞれの結ともあるのめぐに、誰もしらねばめまで、それぞれの所どものあなたるれ中より適にもなけれるもとらうほせるすべては、後より見る故にこそあれ、もとよりわかしるまで、其引出せる本集のもとべての所どもをも合せて明らかなり。守部もはじめにかくなりつるも、大方のてにをは、何れも、それぞれの用ありて置たる上のをちらしいるまうには、その物と取分ちも、その物を相兼ねるぞ、その物を指定め、や、何も事を疑ひ、こそも物を撰び出るづ如各一ツぞれぞれの用を役て置ぞらするなる又それぞれの受辞にありもあるべき例ありとの、その右のめくゆるなる音なるもればそ別に受辞あるべきものなるとて、八代の本集にもなると添く

試みて、ものとをちがへて、ちがつ、紛れなどを愚なるべ一つをもて、推し拙なべき
ものぞかれば、ちがひに先一端をとらへ置て、格段の定をまつるべし。これ
ば為の結ぶは、此のまも格と立て、廿六七箇條に分ちられどもを先結の
格を、皆除きて、只辭の用べきものをのみを、二三出るべし。
古七 百九 ちはやぶる神のきりくうにたくうにたちもせの坂もとられぬべしなり
ひとおもひしのぶれば、ほのぼのとあけぬるかたの月ぞ
此歌を、の結びとしてなべて切て格とられどもの結びて切れる
ものあるべし。のを、をを云ふの、親しき附のて、結にも、紐鏡をそなへ、三十八九
段の、二轉の格まて、只、引きまるべし。
古十四 長十四 君やこしわれやゆくのの上五 ゆめかよれば思ひそめしや。の結びなるべし
心古

此歌と、用の語より受るのとなる。これもわろし。のを既にいるゆゑに、散
語の下にのみ附て、用語をを受るを、絶てあるべし。結をこれらの所
に、用語より受るをを、其處に、神語と省き含めて、ほぐけるなり。
そを古今ふるを、君やまん我やゆくの卜五のいとをへとをを畧き
後撰をを、君やこしわれやゆくの心ノ五の定めるべれどを云ほどの言を省き
て、續けるを也。たれしのびまををとをを、忘れど卜去契のををなり。
ををのほどをとつけるを、今を限りのをを也。ををのみをけのとき。
今のきはをを云ものずくてのべし。結を此等の呼由を家をわろ
で、只用語より續けるのとけをちくてを、初學の輩、の言ーを
用語より受るべをとををられて、びをを引出るをもけをうがるきなを
なるををなり。

古十五
ふきてるふ野風とさそはれぬ秋ぞ
好忠集
野ぞ
源氏蛍
あ〜
栄花ゆめ
ぬ

後世の俗の弟子を
之の居べき
今を大なる
やうで
く似つきて
ふ

古十四
ぬぎ

日十八
かり
ぬ
ぬ
ぬ

さるべ云フ さて、物は際界と指て云言るはば、〈さびき 限ナラン 〉うき
限ナラン のを別るべでうし。（彼此さの中ハ、下巻三脂部の初段に出ッ其条を見合せべし。）
千十一 たくるれ出てもる人をきるれてらのつれのくや 老 おもりつくを
好忠集 出てくづまれてわづのとふるつ初をあられ物まり
此数のはと異なるうあくず。今の俗言に、常一通りのジヤ、〈吾レのジヤ、〈オマヘのジヤ、
なぐ云と同じの也。そぢて出せる。〈船ノ小嶋ガ之の軌、又汝爾等の親しク
附言 言はをとて、それて、文は古くも、猶此用ひざま、多くを見ゆ。
古三 まつはもの。ふをうとそれバ、ちくぶ、なくひとこ思にあくるを、のめ
ちれくを、〈言と隔て、下くうなのとを云て、一格とをり、それぞ、をそで隔句
躰の行て、の言を結びてくをあくず。
万八 おほるごと。をちるのぐかるやけどのあらぶし われるをれりや

これをそぢより、結句をかくるより、此外ありそぢ、てくぐ、なるより、隔句、大方隔句
體の学をくるをくをたるく、のより隔てくを一首をもて、それくを一格と
せるあまりをひくるあぐまくぢや、ちるくて是等をとて、の言れ、結び
るあづうなすぐきうとうくをぐも、ぐぐき也。

下巻三轉中段指ノ韓紅鏡中行

○や

や行の音を唱るに、喉音三行の中なる息と一ならに衝出て、猶ほ烈しく、
且ツ急速なる音也。そを一端をいくく、膳と、いと云、膳より吹出る息を、息
と云ッ。いきは、膳氣（イケ）は義也。（気ハ、字音ニハ非ず。日ノ気、火気、潮気など云て、元来の古言也。）又、鬱と物を、
弓とひて、弓より飛る物を、箭（ヤ）とひ、箭を飛ス行と、射（イ）と云フ是皆ヤ
ヨの、通ず如し。されば、此いの詞も、稜威（イツイキホヒ）、勢（イキホヒ）、勇（イサミ）、勤（イソシ）、開（イカル）、怨怒（イキドホリ）、憤（イブリ）、安忍（イヒ）ぐ
の数多う、是皆膳（イ）に因て、云詞ぐなり。又、厳（イカ）、重（イカシ）、茂（イヨ）、弥（イヤ）、益（イチ）、最（イト）、甚（イト）大な

ど云類も、君れ勵む方より派れて、嚴重なる方に往る也。又齋忌努力、勤齋忌禁などは、彼勵む方より、やゞてちゝを入て、しゝむ方に成る也。彼やの音のもゞれて、続は是等に局らざれど、大方てをはの上に用ゐる處は、疑ひと、歎息と、喚問との、三四種のみなれば、そこに用ある音の続のみをあゝ諭せるとして、彼へやと叫び、やゝと愕るなど云類も、君れ急速なる続也。急に飛ぶ物を、箭と云ふ如し。又事に甚切なる時、阿那耶と歎き、阿夜尓畏しなど恐るゝも、愕るも同じ心ぐへにて、彼嚴重と、齋忌との類也。即身に受て、苦く疼とゞ苛辛、痛など云いゝも、合せて考ふべし。又やゝ、やゝもゝ、しなど喚ゝくも、類も、急速なる方れ続なる也。又續紀詔詞に、藤原朝臣麻呂等伊、百濟王敬福伊などゝ名の下に附て、伊と云るも、古事記に、我那迩妹命夜、万葉に、妹與、汝与などある、夜与の通音にて、即呼ゝくるより出いる也。かくて此喚言れ中に、やゝいう

に、やゝやゝなどの類も、喚ゝくる中に、問ふことあり、問かくる中に、其所由を、疑ふことあり、是より終に、疑の方に、一統派れ来るなり。即幾如何のいも、疑のやゝれ通音なるをおもゝべし。されば幾に、疑のやゝは上に置て、やゝ行、やゝいうなど云て、何やゝいゝやと、いそぎるも此故也。又を続きざるも、君の歎息も、喚と、問とも、いづれも急速の一続なれば、皆因に、切るゝ詞なりかれる也。彼れ君れのもを、先守ゞめ、ゝ云べし。例の三格も、古に出さゞる。

古一
谷うぢに、ゝくるこゝろのひゞとにらいづるまゝや、美のゝうつむ。
後拾十四
いつゝ見くもるゝ、ゝ、ゝるやがうりやゝふゞのるれるうゝ、ゝ、ゝ。
此歌も、やの指辞なる事、第一の下に、ナランと云べゝと、ゝ、ゝ、ゝ

ナリヨと省き。その際にて。ナルと省き。此やうにて。ハ。ナランと省く。是上の指
辞に限りて。ひさしく受ざるも可のこともうけるとある也。れて動ぬ
言て結ぶとなる歌の詞の続きもとも。又省る時と加くく
きまげ上の指辞のきまで。ア上入くからざる安きみとも。ゆ。ざきるり。
新古十九
つるぐ川そこやすぐれた妹の名ナラン。
玉の結ひこそやのこゝをけ。秋とこゝをくうりて。あるまでそかゝらずと
いふ。例の青ぐち。やゝ春あでかゝりて。こゝやすぐきる妹の名ナラン
のとるもの。加くて須うてゆべきも。又此除く上のけく格る玉されし春。
こゝや小野玉の名のさびし キ限リナラン。にきせぬものやさるづ名れう キ限リナラン。
の手どれとこゝてハ。やの一格る玉せる。うる歌の形れる也あるを。て
もの格れ玉ゆきみをさびしくるゆゝさるてよ。

段十七
さるけづと申ふこてみほの留ぐこふされや此をとうみやるふね。ナラン
新古
妹のこれ見やをゆまのあまの家。あけぐもちゝきおなのつりぶね ナラン
此まと保れ以ひうやて結ぶやとゝふ。ゝの歌上年入ゆゆし。手のこと上
のをゝにすゝこゝ

呼うくるや
古三
やゝやるて山おとゝゆ及ちとづてん中を中るみわびぬとよ
源氏
いぶせくもちゝにものとおもふれ やゝいふとよ人とるみ
此やのこそ。既上れ歌玉ッけげれ意。次の段上ことと。名合せるん。

問うくるや
段ヤ
うとゝぐゝあわづみ山べれあゝゆ及あのゝがくれのゝ雨をきこゆや。イ五
新古十五
おもひ いづや。ゝ。イカニ
みのゝを山のゝゝ私ちづりしるをいつもとられず

此歌と共の結に切てやと極して、今歌云九て疑のやに語のなるばに置て下と今
結び辞にて結ぶと語の終に置く切てとの二ツあり。ふるばくやを上を続
く辞ゆ受ゆ上ハ大方誰も、おのづから誤ゆハきものなるとやぢめに
置て切るやのことを必ス切て辞ゆ受ゆ古人をおのづからわきまへて
一ツも誤ゆなゆもと、後世の人をとてもれば是と張りて続く格の辞
ゆ受ゆ多しを例と一二出て、わきまへべ有やゆやと云ず定
定まりて、あらやなきやとそいゆず又ありきやゆゆやと云ず定
まりて、あしやあるしやとそいゆず又ゆどやきうどやと云ず定まり
て、ぬやきうやとそいゆず又ゆやゆやとそ云ず定りて、え
ゆやゆゆやとそいゆず。ゆゆて語のやぢめに至て切てやの上を
皆右の格なれば」已上玉緒と云る。事ハ此説の如くなれども、其二ツのやれ、

然るかゆゆゆゆを説ざる故に、ちゆぢめきやうれるけるを也故にこに
聊の其釈を補ひ然云ゆを上をとをわりて、先ツむの緒に、ぢめに置やと
いゆを即君に引る三首此寄のめく下を結ばざる変半に置やといるハ
古一 神ひぢてむをびしてづれ
四三 まつ山ゆうらひきくやいつゆるむ」あゆうをてゆくわてぎ
此三首ぢづく下と結びゆるとをいる也さて続く辞ゆうゆと切る
辞ゆかくゆの二ツの差別ハやと云て只疑のみれ時を続く辞ゆ受ゆ
続く辞ゆ受ゆる故に其下をも又結びて続のむる也」又喚問歎息
此三ツハ音義一続なる故小其用格も又同しき也等のそれ含める時を切て辞ゆ受ゆ切て辞
ゆ受ゆる故に其下も又結びて切もむる也」こそやのみゆも限らず大方の辞の上
も彼ゆるるうれゆきぬるゆ皆此例也其ゆを一ツいそぐ
ぢうゆなゆきこゆるるうる。ゆゆゆるゆ。おつゆゆ。たつゆう。たてつ

なり等の類も、下を云ひ続くる格の時は、るぬるいえい、行ぬるいえい、ゆるいえい、たつるいえい、たてつるいええまじくるいよえ続くる例なるを、下の切るゝ時は、右等れ如く、上も又切るゝ辞よりも受るゝ定りも也。此等れ例と合せて諭さば、合点の行安うるゆなるを、はゝ文まむつうーくえをみせる。彼翁れ心ぐせゝぞある。さて玉の緒れ此條ゝ引ゆ〜〜行くゆ切れゆ多ゝ。何ゆも イカニと云れ含れるを、問ふ方の行の〻出あくる故也。即イカニを問うゆるゝやの言れ結ゆる也。かゝれバ此続くと切るとゆ差を同じゃ此言の中ゝも。疑ふ方れ一統と、喚問欲息の方れ一統とふ依てなれバ此等の言れ統、又上下れ切り続きゆるゝゆるゝを、唯あるゝば置〻ゝぞあゝ置〻ゝぞのゝいゝる故ゝ定うるゝゝば約ゝハ〜さ也。されば玉の緒の其條ふ挙ゆる行の中にも古今十四、あゝふる荒ぞゆるるゝをゝるゝぞしゆのゝるゝ恋のもとゝゝるゝぞゝ ゆゝ 後拾十六、柏木のゝれ下まれゝぞゝ和をゆめと ゆゝ ゆゝ ゝるゝとゝるゝ。ゝれゝゝを句れゝゝゆゝるゆれど、下ゝ アンと云のゝ〜れば、

疑ひのゝ なれバ也れゆるゝばなると同格ゆるゝを、彼疑息の格と、ゝゝ混ゝて出せゝハ何〜ゝぞゝ諭ゝゝ人ゝぞゝかゝゝゝ迷ゝるゝれ多ゝるゝものと、ゆゝてゝゝゝゝゝ人ゝゝれふくゝゝゝゝゝ

是を疑の方なれバ續く辞より受て、二ッのやそどと下に續くて結びて。

新古七 あまの川かよふきしにとはんそでのしらなみたちぬやいかに。

千十四 異文 わたられぬやいかに。ものゝやいふ□あるぬまのうきみときしあてぐれの空。

これらも問ふこれ方なれバ切て詞より受て、二ッのやそどの下を結ぶ。

と含みく切まり、狂うくやを変ぬる数にも。かくるやうつりにしあり。

ナリシ。花やを ナルラン 霞やそどう ナルラン。たのうとや コザラン いるとや コザラン なぐさに疑

ひの方れ續く辞の格もあること。玉の緒に一ッに混じて言れ本義と得ざりし

故なるべし。又此疑のやを二ッ重ねて、一ッに結びてもあり。万葉四 かくして

やれやそどん。同七 かくしてやそどにや老ぬんなどのごとし。

や何

後十三 あらはれどそどもやそどわづ納れうふかひうこうわうぬやなぞで。

新古四 萩づゝを袖にこき敷て寝る夜のあけぬやうにもあるかな。

此歌にくくする詞のごとし。やの言も何より上にうおくべきゆゑあるか

もしらずやれ音義の除にうくわ。さて考に 君のゆやふふそぐら森

みやこのそらやいふるん。 霞やいう形る春るんなどやうに者ぞ

して結びてもあるに對て。君のごく者きたるをも知べきなり。形

數に。 妻づすてるやいづ ナル。玉づれのそどやいづ ナル。 まる

君づふす方やいづ ナル ぞ。 みるめうるかやいづく ナル ぞ の類に。合せて

なぞや

後十 大ぞすてなぞやわづ忘れそうんかいーのはまと人ぞかうん

格十一 ものゝねをあぞやうひくき。 コトゾ

是れづあちうねうをれを引しとあれば

此條も次と一ツに合せて解べし。

なぐるや

（十二）なぐるやうくさもくれぐるき大そらで。わづらふことをあわとそらぶや。（カシ）

玉の緒に大方何等は下を皆かと受る例あり。其中にちなどを。うと受るゞ多くしてやと

受るを。いと出るなり。なぐるを。やと受る例のくさて。かと受るゆ

ゑ（已上玉緒）とのくかとてなぐるうと云時を。俗にナゼニカと云をしてうを。

なぐるに添る疑ひなれば。いつもものゆゑなぐるのてにやをかるゆゑ

て古き所まで尽くべく六帖にはなぐるやわゞ身をせめきくん

あるを。所のをも鎖ひなれば。寫語りにて。古今にはなぐるのとある

ぞ四ツき。右は千載なる。今一首風雅十にもあるを。寫語りなるを

知ぐるし。又なぐるやと云時を。やはをのをして。其故を歌に辞るゆゑ

うにはなぐるうるゝるる例をもて。ぢらめををてかるゆゑで。をて

ふるのなぐるを。なぐ等は言のをを。次は何の條に出ツ。

おうるのや

反語を。所にも文にも。常にはなぐるは叶をわすある辞なて。何ものも

も。有用なるを。あやにくなるを入るくき辞なれば。懇ふさるをおぐべき

おぐるを。ものゆゑをとよくはをるものなり。玉の緒なぐるを。

をなぐ簡條の子。十四五種に分ちて。例のむるうくるれば。大うる

の人も只其種類は煩ハしく。約にはすきに。はもれうむるをめるをまた

尽西。故にそをくをぐに分ちるを。唯續く辞ものかるれるを。

切て辞をうるれるとの。二種に約て。心得安くをとちむを。所謂うち

うくしとそ反を去て對をきうするて物に當れる時殊さらに激て強くゝ辞也故恒に言れおもてもの只何とかくゝよ辞とハ用る場所ことなるかゝれど其を味いとちとふくゝれハ假に卑き譬をてゝくむにその俗言に人は我を侮るて　わろを恒に強自慢をするゝ今夜墓所へ燈を點じにひとりを淂ゆゝじを用ゐるひるてん時彼言のおもてして　ゆきてしん　行をやせんまどつひてハいとかうわくして悪げなる詞に　むげあるもうるゝ故をを付をわのづゝ侮り言に激まされて夫わるゝもの　ユカナイデヤハとやゝに答へらゝく勢ひもつ是即反語の場所まである又或ハ此に誇る人あつて　わゝかく迫らゝに戴き居る此塊をは汝ゝをるぐゝるゝもあるはゝとまど　われハゝわれにゝゝう　てゝひるてん時に例の言れもてゝて　持揚てゝなんまどゝくゝてをいと

ちゝゝをし　そゝをもつ雄此詞とゝゝくゝんまは忽ちに奮激して　棒ゲデ何セウカイとゝゝに答へるん是わのばら所る反語は勢ひ也　そも俗言は上に八此反語の場所一ツもたゞくるゝるし　されバ高は奇に　われやゝをゝゝくゝくゝをゝ　ゝくゝくゝをゝ　ゝくゝくゝをゝ　わゝとやゝをゝゝくゝくゝと激み　ゝくゝに出ちやゝとゝも　ゝ死して人に知ゝ　ゝをゝをゝつゝも命のほゝにゝゝ　ゝくゝくゝく

ゆくすゑ・うくるものみぞあはぬ・もろもろ古人そいと自在にて・すべも文をも・
そ場所と一ツもつづくべはとそ・ものうきやいふるほどの人とも・格式及法
ものうてそなれそでひて・適ゐいづば場所と・すべをもつかわ
ものうけづつきわぐるもうし・
古五 うるはしときき花もちぐはふあはしき菊うるふ秋ものあくんとやゆ
同十一 秋の四れものうくをてゐくるづものひうたるもわれやゆもるく
同二 ふくれをるものてうくみようをひそハわれやそたるくるぐたれる
同十四 そくるひなきふちやいさわく□ふぐけのあくきせたそある波ハて
同十六 はしもあれ秋やそ人のわうるべき□あるをそうぐたるひしきものを
これくそちを絵ぐるあるく上も又續く切うう受るれう・激みるるそ・
ちぐるの奇そ八月はうるうはるあんくやそ!!きそ坊はで結くると・

うるはのわづるく對てひ激くたる也・次の奇そ・八そうのるもわれやそ
ちるく!!そ火しのるあぐにかれそ忘れぬるものと・女に對てひ激くる
る也・次の三首も此でうをそてひるぐしぬ・此やものみいるも南しるなぐる・
!!やはとある・!!はそ歎息して・!!やはとのくんぐるき勢ひあれば・やはと
ある方・はもきぐるくし・
古一 ちるくそはくあるとそ重とぐふるるよ!!清そそあるくも花とそるよう・や!!
後拾二十 さるけるばさくくと人はをくるう・や!!□さくくのあるそちくくるるうもう
古二 ちるくのはるくにくくとくるるのるるば見れうぐひたくはくくま・やは
後二十 くんくもたはるさるる!!はは花ぐるうかくくんくものくれるひうけぎや!!
古十八 ものくれてくそゆうくぐはるふれるひきや!!□をあくわくて花くとそむくる
同五 うはるくるはは秋るき時やさうぐくん花くくちくめ根さくくれるや!!

比彩を下と結んで切る所を置るゆゑに上も又切る辭も来るなり。
激みくるをそもじめの句を女れ〳〵あぐれりと名まをたてれもなぐ
るるて激みて〳〵わづらふ来れバこそあれふこゞはあるを花と名まり「や」
をたちの所くうつろひゆるまをとなぐ反せる也次の句を〳〵ちぐばおるば
梅と折ふ「やを」忍ふ咲ゆゑまをて人も折るなれとを付を折る
勿と答ふる人を激をてつるなり次の五首も此でうをてなのく考へ
味をふべき也我とわづゆく激みてつるもあぐし「やと」やはこのす是も上れ
ぐ〳〵「やの」めを本ハべの結をて委くのうぐ〳〵ぐうんのをある辭うれど此ハ
「んを」うて句ゆる也「そをんも此時を恒のむとを異」てんとれのをなれバなを此ハ下巻受辭部
三十九段出又「やハ」をのりて反語なるぐるもあり「そを」疑ひのやと長をなぐ
の添る也又「だや」をのりて〳〵ぐふやと疑ひをもあり「それ」を異るるもあり

されば本書をゆづりて省くなり。

やハをぬ

古一 をくをむをまをなれるをしぐるをと人れをこをろたあれやを「や」をぬ

同二 ほをくをぐをすをこ「ほ」をきをこをんをびをびをこをちのをれをとをろを「や」ハをぬ

新古十五 わをひゆるをろをとをこをたををををををををををををををををををををををを

れをおをもをまをを「ま」をを「ち」ぐ其事を催して以詞なり上の反語の格以て

いをぐ〳〵ちれやををる〳〵こを人やをを「ひ」る〳〵ををやををするとをぐさ詞のの

ア「れ」をと「せ」ねをこをるをまをを「せ」ねをでのををを結句れをを〳〵をぐでもれねぐであ

れをを「う」〳〵なぐでこをろねぐ養くをを「し」〳〵をぐでしをを「せ」ねぐでををを「を」

とをぐれををををと催促せをれり上を一つをれ「ひ」り混くて。

わや

玉の緒にしれやと五種に分ちて、五箇條挙げれど同じもの相混じて、其処に
そゝぐ三種なりでそもし。

古十八 水のみなかみにおちくる月はうきぬまにうきぬまにうきぬまに

いづいく何まぐさ詞とおきて其中間に云入るるて其の欵息を
うけ回る也やとさたくるは欵息のを再きてかくばかりて語の
ほつとうなるんかぐそ。

後十九
ふるさるゆてぐりまたるわや□ものもおきうつり移く

後拾十三
ほぐもるくうつるうるなるるわや□きてぐだこそやーえたーう
ぬすどもどへなふるるぐ。いうれるぐるのを也とくれどこれも移ふるのをに
して何ちほぐきるるを下巻に出せるへるぐ。何ちちぐ。心何ちちぐ。
ふる同例ちう。他ふる也欵息のように通ふやとるたの結びを留てぐのを
とるるは。いうきしぐを也。右れ哥ども。玉の緒二巻十一葉に出ッ。合そべし。うれば以上三種
を。皆一ッうてばぐちう。れば。れやのをとれやハのをとふるのをとの三種な
ると。五種に分ちるる也。右れ心得ぐべくもある故也。さて実を今一種。頼

みをのれやちうこれに出ぐるはいうふぐや。をたなうほちうをも。下れ
欵息れやのまるるう。

やぐ

後九
ぱるるておるぐるうるてなるるをるぐるるるんや□そ。

拾三
ぬるるるて一ぬるるたあるるるるるるるるるるるるんや□そ。
るるへやれれへやれるぐ同種るるるを也哥るるるて其ヲと
も其ハとも其モともきるるぐのうるるるるるぐ其るるに漏るるを
なし。

欵息のや

古十二
ちるるものきるぐ入るるのるるるぱや□人とるるくるひるるるるとも

後拾十六
おるるるるけのおるるれるるるるるるあれば移大きるるのるるるぐや□哥る

歌息のやとよりたびくいでくゝ世を切くゝ離りゆきて
まくゝ忘れば忍合せてきぐし・物語りうれを次く出ツ・

の云云や・

後拾十二 いうくゝん□あれやくゝの基は月や□とはの手きれかくゝまうば
金八 ヨ 九
ゝ・ゝ・ゝ・

此類と彼一首のことなれども、同格なるもいづれあるべしとぞ
答へるやうにて、ぞうこうさあれば、後学徒の人のなほ泥まんこと思ひ
て、ひがく弁へわくふべきなり。さて此格を、萬葉六に、忘もうるかうの
ほとあらうひる鶏にしもあれや東西なきまし。同七、さうれ小堅西なきほふ
ふ時をまもあれや時をまもまんなどの類なり。上に今一種あるべし。
その例や、即是也。

よびいづのや

ぬばたまのやふしの里、おもふ人やとほの山、うづくやうの山、さら
しなやをばすて山、さかりやをばの山、此等を所謂呼出しのやうにて、や
即上のこと也。又、をばすてまやをばすて、神代やいせをばす
ぬ、を、性相をばづら、呼出して續くるなり。狂歌にあり。

柏子のや

ぬばたまのやこのよ、ほくばくやさ月、夕月よさやや岡べれ、
ぬばたまやわうの、ぬばたまやもみぢ、まやまやまやまの、
を所謂柏子のやにて、大なる白れ中間なるなり。よのことなるものみを同じ。

ぞや

古三
さ月こだちきもふるるんほくばくまでのあとときうばや
注抄一
こうろうしんくをぞやロほのくるのうはやうのまのやーきと
此歌ふとれぞやもやを柏よのこと、きうばやいばよ、ぞやぞやを。
ぞやぞやナの事也。さうに初句まだにねてよりうるそ。即ぬばたまれ。
きうばやを。いくばやれ。とばれ。ゆばやまなどのめく。下に欲の事と注
てよみきり。

○なふ

玉ヒ緒云、なふ、まど、なで、たれ、たづ、いく、ろ、いうふ、いうで、いうでぞれ、ぞ、件の數ぞ、てゝとけの結びは格同き故に一ツに合せて何の部とすとある是々此等の云ひたることと解むに、かくしも辞の數は多うるれば得こはくも、うのでぶ、ぶいうで採出てそこ、先ッなふのなハ、直價などの通音にて、物ヒ分量とらふ辞也、今の世れ言ふも、直代直段など、價ヒ量に、いふ、荷と訓むと同く、物ヒ程をとふ言也、などのとゝ、底世を常世とも通して云ふて、涯のことなり、外門戸跡留止終まで、ともおなじ、次の誰のたも、此との通音なれば、下の釈に合せて、言ヒを味と考へべし、までのそも、直世ヒ、曽て、物ヒ際界涯を云ふ、上ヒいくそヒ條、又下巻三轉部の初段等に出、なれのたゝ、當代量、價直等ヒ、同語同意ヒ言なり、又他を

ふ、ふ、ふ、相まれるものを、ふ、ふきと云などのたも同し、れゝ、等の轉也かくて何字を、ゝと訓て、奇も何方を、ふ、ふ、ふ、ふみ、ふの平言に、ドチラ、ドナタ、ドノ邊などゝ云とも、此たの通音なれば、たれとひて、何人といふ、ゝ如きなり、たゞゝ、右ヒたれの、等と省き、ゝと添てるれば、即誰之也、いくのゝ、ゝ行に活轉て、疑のゝ、又數計のよなどの通音、くゝ員數ヒう、幾許のこヒ通音也、いつれゝ、右のなどのとたれのたまどの通音にて、際當のとれば、恒に其時を指當て、何時に云なども、違ふぞる也、いうふゝ、幾何ヒ、畧き言、いうでゝ、幾許の約れる也、いうでハ、幾直ヒ約れる也、さて以上三ッのいうのうハ、幾ヒくの轉用まゝ、相合せて知べし、いづれハ、何所等、いづは、何邊等の義也、此詞ハ、此條の末に出るべし、其処に委くことわるべし、先ッ大ふ、れゝて、其大略を心得て、右ヒ中、なふ、いうでの詞まどゝゝ、別義なるもあり、そゝ其所

まてしるべし。例の三轉れ結びを下巻に出れば。こゝは出さず。

（拾十二）きぶのひとしりのすゝうゝきるぶせよこゝれ。あゝのもとうはゝ。

（後十二）ちゝうれどもふうはきて。□あゝのせものゝそでなれゝるん

此歌を上の結の詞の受を。ゐりの下に含めるも也後拾遺るを。もとうる

浦（ナラン）とゝゝと省き。後撰なるを。何うはきて（アラン）とゝと省きてゝゞかし。

こと動のぬ言して結ぶとゝるゝゝはゞの條に舟じちゝアル。

（金五）いうげゝう神もれしとゝ（五アラン）うく山□ふゝげのまれちうの春一茶を

此歌を神もれしとゝうとゝ山まいひうゝるなれば。

ランの省れるまゝ。ゝるゝと同例なり。此格のゝも。ちう往々ゝびれば。くて

やみつ。

（後十三）れゝふてゝふゝくいうふ。□ゝゞれはうきゝゝのとゝはゞゝゝゞ邪

（拾十五）ひゝゞゝたゝゝゝゞはなゝふうは。□さゝあゝゞあれいきてうひゝきゝゝのはりゝゝゝ

此歌を切ゝ何ゝゝゝる。是も何の紐れ切れゝゝゝはあゝず。結びと省ゝれて

（悔ン）

切ゝゝあゝ。そかくゝゝとふと打きうん人をゞれゝゝ去も同じきゞゞゞ思ゝゝあ

ゞ。結ゝゝきあゝず。そもゝ疑ゝの紐をゞゝゝ。いゝ重ゝして。結ゞあ限りを切

是ゞうゝゝと。玉の結ちゞゞのゝゝに諭してを初學の徒がゝる詞をも切ゝ

ゞありゝゝゝ心得ゞ言の本意を乖きなるゝゝにひゞゝゝゝゞれば切ゝゞ

き詞の切ゝゝを其所由をゝて。諭をゞきゝゞゝゝはあれ。

何をゝうゝねゝる

（後十八）ゝの中をいゝうゝやいゝゝ。□ゝのゝゝゝ

わるかもへいうるやいうるなるべしとかいうるもいうるなるべし
まづ下と結びつるも多うれば、それに對てそば省きつるをもあきら
うるべし。

もはしうるつる

古十三
うばたまのやみのうばたまをちかづうるゆあるべくもあらざりけり
後拾四
さびしさにやどをとはんとおもへどもあきのゆふぐれ
玉の緒ともゝ変らぬ格を、結びかくけるゆゑあり。そは他の所以と考へた
凡そもゝ物と相兼る初てもと添云勢ひあるうちを、彼と此とを
相兼、物二つ跨がりて、疑ひの語も、物をたくぶる方とふれゆく故に、結
びまぜるもかくるべきうち、されば等ゝ、僣に加へる詞ゝの如
く、いくらほどもいづくの里もと、各かるいうたくぶる所あり。よくでき

の形ひと様もつづし。

もと受ることにてもを省きつる。

古十
そいくらう。まゝ〜ふれば〜をひとゝもこの〜をなづりて、おもひつゝなる
ほ於十一
おもくるしれまきのはしのぎまるる雪れいつ。とくべしと。ゆゑ取君う那
山鄙をもとゝそだれども、もとゝ云、物ひありて、何を、ゝ、ゝ疑てえうあら
されば、結びて物ひつゝぎる也、れるとも巻の疑ひの詞すて、結ひる物はつゝぎる
ゆゝいくらゆゑ、結はきまう。

他の物をまして、何とゝくる。

古十四
ひのくるのうるはおもそず山ふれとゝたまこんとゝとのみゝて
四二十
みちのくはいづくもあれどきわのうまの浦こぐふねのつまでうれしも
万八
いづくはあきらまるとゝまぎるのゝたまものゝこゝでなく
ホカノ処

万十七
梅のそれいつはをじといふねどさくらのはうつりてとしきのあ
はかの時
はかりそをしてえつのつ對てそれまゝわ他の和と何とくらうるなる
とずそ其他のかもて思そずもいはくもあれどそ乎他の所もあれども也其以
ちと傍ゝこゝくしる何てゆゑづし。

他けくをそしてたれこのくる

古十四
ゆくのくれものゆゑもゆゑてくれゆゑ
他ノ人
拾十一
生けるものゆゑもゆゑもゆゑ
ホカノ人
後四
ちくしくをそれるくにあくにあくにあ

ナニシニ為レコトゾ・など悔てもこれ・又たとえば此盃を・汝が破リタルカ・と答へら
れる時まづ〳〵・否我デハナイ・否其ハ誰が為シ・なぜ云ふと是也・

なほせんか

古十四
あかつきでのうつみもれたまにをてもこころのおくうり
後十五
あかつきせんにうつのこゑをなんとうたふとうづくまりて
古今かうこゑ・否(ナニセ)香(カ)ん歌(ウタ)になぞらへ・後撰うるこゑ・否(ナニセ)香(カ)ん悔(クヤ)とこゑをこむる
ことゝ・ひくにはづけこゑ也・歌の結こゑ・この句を並べる・拾遺十なる・こゑ
なんはそなこゑせんいろる身のあこゑ人をこゑなく泣れ・こゑ何こゑんの
こゑてしば後の歌くこゑを別ることゝ・ゝこゑられこゑ・こゑうこゑや・

まにしを

新勅十
ちらしかけせごちにはちまぶ・ほのあこれまにを・はちひこゑあちん

六百番寄合
うこれちのあうこゑものとあまこゑのせこゑをまにしをいこゑぎこゑこゑん
此等のこゑも・為のこゑをて・上の歌に為(ナニセ)んみこゑこゑ同し・ゑの結こゑ・ゑこゑ雖
ゑこゑこゑ・ゑこゑこゑて上のこゑめく以下・是まこゑこゑ皆否(イナニ)歎のこゑ也こゑ・

ひこゑ何

金五
まこゑこゑまれこゑこゑこゑのこゑまにをこゑこゑこゑまこゑこゑこゑこゑこゑ
續後二十
こゑこゑのこゑこゑこゑこゑこゑまにをこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑ
大和
こゑ
堀百
まこゑこゑこゑまこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑ

是こゑ以下のこゑを・疑ひこゑ同語こゑれこゑ・用ひこゑこゑの異こゑる也こゑ・ふこゑ
こゑ此こゑ・ゑ・ゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑこゑ
こゑ

其量(ホド)は計(カリ)がたき方なり。疑ふ方ともなり。又は添へて云時は。彼此と相兼て。其量(ホド)とくらぶるものをもまた。又此(コ)の如く。何ぞ/ぞと云て。分量(ホト)をしらんとなる也。「方にたまのをと云詞を。恒は長しとも。短心(ヂ)へも。ふしの間はなとも用ると。同也。かくこまかに云とらちていふる何ぞ。伊勢物語下巻は。何のきこゆとおもひて。又上巻まづに。なぞふもきく人のめ」源氏は。なぞのうあるこんもぞ。又仁王の言に。「何バカリデモナイ。まは「何ンデモナイ身分ジヤ。なぞふもあるも其ノ何ンでもまくらふをせ。

古八
うくるこまもまぞはありてあるうひもきてもとまるぬ名ことをあれ

四十二
いのちやてなふぞは寿のあぞめとあふすうえばをうくるくを

四十九
てあるれぞなまぞはもやくるやはぞれてあれど何ぞくもをし

いうるこん

古十八
いうなこんいとこの中にまばうは笑うきこのきこをばこん

新古六
ふうえぞかあうえひうれていうるこん「まれく賀茂の神もぎ

此歌のこんをるの延とこそて。古今まこて。いうれるあもれば。下くはぐき。前者をこそいうこうれをまれば。切まこち。れ此るの延ぞるこん

を。下巻三稿のこんの除をも少し出せり。

いうふして

後十
出こりしてはふまこそしいうこうてわるぞこうこんとまへへば

四十三
いうこうしてかくれるふまこんぞはぞまるぞできこうかこしこ

此歌とを。の結て。俗語に。何とぞしてと云を也とのこうこたぞるをいうふを。

既こえごとく・幾何の義なれば・幾量ーてと云心ぐくて・即〳〵そまよて
とえとなれどゆきとものやや・

いうで

拾六
たちもあらばいうでみやこんぢやん
日十六
こんとのくだおまで名ちてねりつめいうでわづとくーらせん
いうでを幾直は義なれば・是こそ俗に・何とぞ・ぶうでなどこをまへ
あれ・即俗小云・何とぞのそも涯のきまれば・當・直・量などく・終こ同云
ーりおつめり・又このいうでを・いうでうともいひく・何とーてのをこうて・
豈のつまれぞ・それハ者なると・

いづく

古十七
まれのをづめやいづく。ーこそるぎれいその広ひけ・みまれ出こそり

後二十
ふまれたるそいづく。と結こはぐいばれのこれ・みすこいくもあ
此詞・つちらへうれる用こもり・いづくのことを・学ヒれバ・いづくと云て・何邊
等は義也・俗こへドレ何所等ニと・尋ね見ることあるも・邊のことを含みる
故也・れもこを・下巻三物部・四十段こ出る合をぐし・

いづくは

古十九
もづくもまづきれくこあるぬめり・いづくは□家はくーりどころこそ
後十
やもうくもいふこのもれそこれうれ

古今なるは・れのことをーとこを・ドレ何邊リが長カルゾと・尋ね問こるを・後撰
なこは・葉の上こは・家はくーこのまほづ・ことの葉も・ドレ何ゾ
邊ガ懸リ処ゾと・やづめこる也・

いはしーう

後一
拾十九
松をひろめんとしたまふ御きちうの御しるしとて
いつ〳〵。はくまのさつうかたくやるんにれまし人もなどのうぢ〳〵
八〳〵。又いつ〳〵とゝうそ。いつの辞。下までかゝれる故こゝにこの詞のめぐ
りまして。き銀と結びつる也。きとゞこそ。為の義なる故こゝ。いつゝまくこそ結ま
為うし。八こそ。為ぞやのこのある也。也八其結方こゝ紀。いつ〳〵ア。歌き
る色なる故こゝ。いつの辞下までかゝる也。彼相兼ることの差と思ひわ
だ物ぐし。

いつ〳〵と

金一
いたり〳〵。あるゆくこゝのうるめるとものやまとうた
門
いたり〳〵。まのもるしたこゝたるものとめしこゝたれ歌をうりる
八〳〵。いこゝ。こゝて受きうそいつゝと結こゝ。こゝ時こゝて。こゝなるゆえこ。

いつれ辞。いこゝて受きうて。下へそかゝらぬ也。但まれゝまをいつ〳〵影と
て。こゝなるもあり。ほ撰八。八いつ〳〵。トク咲。とのこゝこゝもかゞゝくこゝの
るゝたまこと待こん。拾遺九。八いたり。トクとあまてゝたれば涙ぞうあと
いるゝこたあのきうる。同二十。いつ〳〵と待々テ君みとかりこゝれ
をば法のうるでうそこゝのみつる。なのゝこゝは世のかうそいつ〳〵ふ
とゝゝ。ほもあれど。八代集までのかうそ。をゝこゝたらむまづき詞
みもあまづうれどいやしくちゆるやうちう。

いく

玉の緒云。ゝゝいくゝゝ云辞。初学のまこゝぶうに八くゝゝ也。八代
などのうて。多きこゝのこゝきるこゝたるこゝたるこゝたるこゝ也。いくゝゝ共数と同
小詞也 以上 玉の緒など。雅じられる。一せうきこゝのこゝまれどこれこゝつきて。

と載集の下ども引出く謗れるもとより、そなりて万葉集中に
幾許と書るも、幾ら許又と云意の字なると既に上に
こきぶなどみて、もと多きもの、久しきもよりれば彼いくよ世
つぐ代るとも、あれぐらひぐすと、なほ世と云言れ
あまり常に多くうるさきと諭さんとるべば古人のすれる世のくれ
もぐきあるもくるとこの信者
八重山、千重重れるもの、七尾、やり峯、年の三世、七
と世、なほ世、やつ世、百と世、八百と世、百ちだ、ちだ、此麁の詞共ハ既に短寸撰格
と、數多挙おられば、此とも省ら、もと何ものもて知ても、多くも數の言ともしし故と、
わのづからと高くと雅びてもけるとも世の人も、右のめく數の言として
いとて有ともれば、ぬく其とちつづるとけ、世俗の例ぐもちり

○こゝて

こゝて、二義あり、其一のもとも萬葉に、乞字と書て、冀ともちもとあり、許
曾、つい義つき、許増など、形ふとふ多くみる是也、こゝ、この音に、好嗜、
請乞、恋焦、渇望など云一続もり、又此許曾と活うして、ちり許須莫
ゆめ、あり許世奴うもなど、こゝとも世ともとれ、の活用と合せて
思ふ、こゝも、為の略して、乞為の義なり、今来、今来と、ゝんが如き
もり、為の言れ、今と活く所由も、下巻三鶏部の廿二段に出ッ、又此こゝの言
に、社字とよりの習ひ来つるも、彼願望むもの、むかし神社に奉請もり、
もるもり出る義訓なるやや、其二のこゝて、此其の義にて、其物、其事の
あるゞ中に、此其と、撰出て云辞もり、右の二ッの中、彼願ふと此方も、古

事記・万葉等の古き歌のみ・あまたとりあつめて・古今集こゝろのかの・をとこ・をんなの・かなしきを・をかしきを・をかしきを・をか

八ツ橋の流の川となるなと云て川ち千るゝ引ゝ云るなり。
ナレと今あるなり。
金七
ちはやぶるでしらつゝにそまでも音のむまばこそていきのまつばら
新古十八
カ きまつぐすしらのくよぶにまづむなよ分こそかくてもやまぐはの松
此歌金葉なるに八松むれば云ていきてもあれと云べきと云よの松系ちはひ
うけて結びと云中ことあるなり西彩古今なるに分こそかくてもやまと
云べきをやまひとうて結びと言るなれば此ひうるなるべ達へ新
のみうて松と用ゆるなれば第りの下に八いきの松系ナテレ山川の水ナレ
と加へても結びの格八妨げざる也彼上の八形見こそあるの大野の宇と動
うぬ言て結ぶこそとて分ちられど言て此格と同一なるなり。れ
らと以てもるべし。

古十四
万十一セ
いきのまつ原ものこそなるべく人の見こそ
此歌に恨る旨のなれば此其とこそ出置て主物のみとりくひぶ寺
う大方の例なるこそ適こそ
格稚のこそと句れこそなるで引ケて学りと押へ学りの下に結び解
を省る也古今なるに八オモヘと省うり万葉なるに八アハネと省れりことの結
切こそこそとこれどこそ稚又切こそうあるもあるべかく結びと省る故
に切こそ也ゆくのみこそ此こそ足ぬべ成こそこれど既上のそ
除ても此格ありてそ成ともいれバかくてやうとてかやゝ結びと言こそ
省きいるもある以て上の二種も狂言同一なるなり也。
こそ八

古十四
いくとせゆくすみよしの波まちつゝかくこそぬるあるうな
四十七
おもひけるやそしほのしもくもるふしぬ
はるとまの結てけりとたきのいとるれどもそ物と分つ絆る級に成せて
いくとせもすれば世ぐるまてかやうこそは又もとなとぞ世し分て分ちて
しひ沈るまてかく世系絡あるとふこそ神もおりひもむるめと何ゆるき
すてしいと分てるなれバはるゝ知てちとこそてあれ

そこくそ

古四
あるひとん人をそあらぐたるぐれそきほぐよるちもてこそれ
後十三
ふちるぐら人のよはそぐまぶ川わてしばあさき形もこそ忍れ
もとの改ちるめく初二ツと相比へ兼る絆るそぐ此もこそ今とこそ見
後とと相兼て云故に法ひとの事と危ぶむをとそなるれら此ら

既にもその除こひつ

ほ九
人のとしもすくしいとばきあうれ君もこひをそうもこそてあれ
拾一
分みうてあやめくもそしゆるみとるいとばはのちもこそてあ也
四十二
もほぐこのとりみちもこそ人をそゆけもぐ紙のるも忍わばをしき
もの絆ぐ此ぐめ二首とぐ上のもこそてと中ちてあやぶむをのるき
格とし次の二首の初とぐ巻のこそのこそ物絆ぐ格とて二格ぐちち
れど紙うとるくの格どのもこそあるぐ共ぐ巻の相兼るも也て通
そをすどるの上ぐちのかうみちてかーで変るぐ絆るも物なくそて
ぐあるそ大ぐる絆の初巻こそて、それと以て分ぐば限るもあぐべうぐ
又紙うぐぐきそ牽ぐ方そてそをの関ぐ和ぐまそあるぐ、てこそなく、て
ふをはのとと以て、いぐくまでも一ツを推べきわぐ形ぐ、又此奇どの左れ釈ぐ、

此格を大うたはちうつぬるものつるこも音ひとつの了簡まと
そあれ紙のうへらばなどうきうつぶらん。

志もとて

後十一
あひそそばきくさむやとで拾十三
わもれるんそそそそぶとはるひてゆるるもそそ乱
もそ志其のそ志もそ歌志の声そて恒そのと摂分らてふ語勢そて
の諱と図をなるとと重れてげて強うしむる也。此志ものそ既そ上の
もの条そいへ足足合
そべ。それバ逢する表を鶯もらぎきの明るそ行をまでもこ一ア意
しきうく彼と此とを取分ちているれか又拾きまるを意きへと
結表此そて夢そもそべきそのまるそそ志れんとれもは此しも差る見
そもよれて二ツ合せてそ一ツとやり分ちる也是をもの結そ却てのを

そもうれてもうれてを意の志そ首そてうしく仮義のふくなる足
ゆそれむそのでうし。

さそて

拾二十
あをうぶほとなふそうの
千六
いはのまにうそひのうのおそうの
円五
秋そもあべさそそそ葛はそべうのうのうれうきや
むの緒そ此歌の奇と。三種そ分ち。各五首ぢく出して云ぶそべの歌を
にそそと云そ也。中の奇を。さそでそ知そそる也。末の奇を。いうをうれ
てちゆそくる例のうそそし。さを紙の絡れるて凡て一ツまれバ何を也
俗そ。さやうにそも。それおどふそ。云を以て見べきなり。

古十三
うたくらはさもてあるめ多くくめとそるとうかひさ
金七
ゆかてかあとはるくさもとそてはうつくきくるもと
拾十五
さもくそてはさくるくのうするめわたれどそくつよ当てのるき
多結くらかのてるのれそくとやうすとをもくるは是さらに次の二首
そくふるとれる格と同しものるは此歌わろしいまそ既ゝ如く紀の紀と
まり結そ其と指詞まれバこれもくそれわどほくきやうくし
ほどもまくんくのかくくめまどのをもそと結くると不添あるどめ
そ上れもくそもくはのの例れどし
くくれ結ひと結うくる
續古十
もくふくく人のくくろもうくふとくろくもくるふどくくくうる
五社百
ゆくくくくみやくのもくそひきと袖う波くくもちのくほどよ

新千十七
ちくそひくくくはくくりものとわひ分らふなどふひむん関のふひ川
玉の結くこれくの奇ひもをくを結ぶ格くせるもはひくしくそ續古なるも
くくくうはくくと結ぶべきくと結うくくはひけ五社百首なるもくくくく
くひれと結ぶべきくと下句結うくくはひけ彩千なるもくくくはうくしも
受まひくう下句結うくくものとくりてけくくくくをもひの拘ひうくる
ふうくはあひけ・まれけ
新恒集
明ぬれバはまくの明ぬをくるべしくくれどくくくをくんとまふ
後十八
せきいまくるる名くくくなひけくくるくくくく

ものなり。

かくてもじのもの除くも。此こその除くまでの。上指辞どものもとをたて。

下巻なる。下受辞どものと引あらせ。よりの辞の置ざまうけざま。

うもりあひ等のをもむきとけらにうまくあらはしぐさまう。